

# 三島由起夫『音楽』におけるヒステリー表象 —シュテューケル『性の分析』の影響をめぐって—

朴美姪\*

(e-mail : mjeon44@gmail.com)

## <目次>

- |                      |               |
|----------------------|---------------|
| 1. はじめに              | 4. 汐見と「ヒステリー」 |
| 2. 『性の分析—女性の冷感症—』の受容 | 5. おわりに       |
| 3. 麗子の「ヒステリー」        |               |

キーワード：三島由紀夫(Yukio Mishima)、ヒステリー(Hysteria)、音楽(Music)、表象(Presentation)、  
精神分析(Psychoanalysis)、ヴィルヘルム・シュテューケル(Wilhelm Stekel)

## 1. はじめに

三島由紀夫『音楽』は雑誌「婦人公論」に1964年1月号から12月号まで連載された長編小説である。小説は精神分析医の汐見和順が冷感症に悩む弓川麗子の症例を記録した〈女性の冷感症の一症例に関する手記〉として描かれており、麗子の冷感症は主に食欲不振、吐気、チック（顔面痙攣）といったヒステリー症状としてあらわれている。

『音楽』は三島由紀夫の代表作『仮面の告白』『金閣寺』などに比べると、先行論はあまりにも少なすぎるという印象があるが、おそらく『音楽』は「三島由紀夫氏の作品系列のなかで、主流に属するものとは言いがたい」<sup>1)</sup>からであろう。加藤邦彦は主流でない理由について「「平易な文体」にこそあるが、一方でこの作品が精神分析を題材としている点も見逃すわけにはいかない。（中略）そのことでこの小説は「推理小説のごときサスペンス」としての性質を備え、「エンタテインメントとしても上乘の作」となっている。三島はエ

\* 九州大学 博士後期課程、地球社会統合科学

1) 渋谷竜彦(1970)「解説」『音楽』新潮社、p.257.

ンターテインメント小説と目される作品をいくつか書いているが、それらが三島の「主流」でないことはいうまでもない」<sup>2)</sup>と述べている。

『音楽』は日本の「精神医療の未来を先取りしたような作品」<sup>3)</sup>であり、「最も早期に精神分析医を主人公とした作品」<sup>4)</sup>で、「今日隆盛を極める都会の精神科クリニックを描いたという点でも先駆的な作品」<sup>5)</sup>であると評されている。西昌樹は「サイコセラピー空間を旋りて」の中で「三島は作中でフロイト、シュテューケル、メダルト・ボス等に言及し、さらに性的興奮の恍惚の表情を聖テレジアの彫像のそれに比しているが、これは精神分析とエロティシズムへの強い関心を示している」<sup>6)</sup>と述べている。また、一方ではフロイトに憧れていた三島由紀夫が『音楽』では「実存主義的見地からは正常人、異常人は等価で、フロイトのように一方は正常、他方は要治療の退行現象とする「アコギな」真似はできないはずと、語り手の精神科医に述べさせて」<sup>7)</sup>フロイトを非難していると指摘している。

朴秀浄は三島由紀夫が性科学・性欲学に興味を示し、その知識を涉猟したことに注目し、『仮面の告白』と『禁色』の中の同性愛言説の受容について論じているが、その中で「『仮面の告白』や『禁色』は、三島由紀夫における西洋性科学の受容と展開の側面をたどる上で重要な作品である。(中略)三島は『禁色』連載終了後も引き続き性科学書に没頭し、女性の冷感症を題材とする『音楽』では、ウィルヘルム・シュテューケルの『性の分析—女性の冷感症』全二巻を引いている。そのため、三島が書いた文学作品と創作の際に参照した研究書とを照らし合わせる実証的な研究はますます重要になってくる」<sup>8)</sup>と述べている。

作品の中では、フロイトやシュテューケルなどの学者の名前やその理論が用いられている場面が多数描かれているが、特に三島は作品についてのインタビューの中で「シュテューケル(心理学者)が、文明が進歩すればするほど、女性は不感症が、男性は不能者が増加する、というイミのことを言っていますが、その徴候がじわじわ現われてきていると考えます。

2) 加藤邦彦(2011)「冷感症の時代—三島由紀夫『音楽』と「婦人公論」—」『梅光学院大学公開講座論集 第59集 三島由紀夫を読む』笠間書院、p.121.

3) 高橋正雄(2016)「精神医学的にみた近代日本文学(第20報)—三島由紀夫—」『聖マリアンナ医学研究誌』16(91)、p.50.

4) 前掲書、高橋正雄(2016) p.50.

5) 前掲書、高橋正雄(2016) p.50.

6) 西昌樹(1993)「サイコセラピー空間を旋りて(「仮面の告白」「金閣寺」「音楽」ほか)」『国文学 解釈と教材の研究』38(5)、p.36.

7) 前掲書、西昌樹(1993) p.36.

8) 朴秀浄(2018)「三島由紀夫における同性愛言説の受容—『仮面の告白』と『禁色』を中心に—」『比較文学』(61)、pp.72-73.

それを背後にこの小説を組み立てました」<sup>9)</sup>とシュテューケルの影響について言及している。主人公の汐見が冷感症を治療するためにシュテューケルの著作を参考にしており、その一部を直接引用しているが、これらと密接な関係のあるシュテューケルの著作としては、三島由紀夫の蔵書目録にも収録されている『性の分析—女性の冷感症—』<sup>10)</sup>があげられる。

『音楽』において精神分析は主な題材となっており、中でも精神病理学者のシュテューケルについては三島自身が言及しているなど、多少の影響があったと考えられるが、先行研究では、まだその影響について詳しく論じられていない。本稿では、三島由紀夫が創作の際に参考にしたとみられるシュテューケル『性の分析—女性の冷感症—』が作品の中でどのような影響を及ぼしているのかについて考察を行いたいと思う。特に、麗子の冷感症の主な症状として用いられているヒステリーが作品の中でどのような役割を果たしているのかについて分析してみたいと思う。

## 2. 『性の分析—女性の冷感症—』の受容

ヴィルヘルム・シュテューケル(Wilhelm Stekel)の一連の著作、『衝動及び情緒生活の障害』(原題：*Störungen des Trieb- und Affektlebens*)の中の第3部として収録されている『性の分析—女性の冷感症—』(原題：*Die Geschlechtsskälte*

*der Frau*)は全2巻として1920年に発表された。三島が参考にしたと見られるのは、『定本三島由紀夫書誌』の「第五部 蔵書目録」の内容によると、松井孝史が訳し、第1巻が1955年6月に、第2巻が1956年2月に三笠書房より出版されたものであるという。その著作の巻頭には、シュテューケルを紹介して以下のように記されている。

シュテューケルはウィーンの精神科の開業医、フロイドの最初の高弟であり同志であった五名の中の一人で、アードラーと共に「精神分析中央雑誌」を編集していたが、後になつてフロイドと説を異にして、アードラー、ユングに次いで師と袂を分ち、独自の主張をもつて一生を神経症者の治療にささげた。<sup>10)</sup>

シュテューケルはフロイドの高弟であったものの、「フロイドの教義のうちに、実際と背馳するもののあるのを感じ」<sup>11)</sup>、フロイト学派の脱退者となる。三島にとっても「フロイトは中学生の

9) 三島由紀夫(2001)「解題」『決定版 三島由紀夫全集』第11巻、新潮社、pp.625-626.

10) ヴィルヘルム・シュテューケル(1955)『性の分析—女性の冷感症—』第1巻、松井孝史訳、三笠書房、p.3.

ころ私の左右の書」<sup>12)</sup>であったが、早くも1941年の「学習院中等科在学中に「精神分析は飽きました」といい、それへの態度は終始批判的」<sup>13)</sup>であったとされている。三島がフロイトの精神分析に「始終批判的」であったのはフロイトの精神分析が「図式主義」<sup>14)</sup>的であったためだと考えられるが、シュテーケルに興味を持った理由もおそらくシュテーケルが図式主義の下で「ことごとくしりぞける」<sup>15)</sup>というフロイトの教義から離れ、「直観」<sup>16)</sup>という体験的把握を重視したためであると考えられる。

『性の分析』の序文には「女性の冷感症をあつかっているのであるが、それよりはむしろ、恋愛そのものの精神病理学であり、精神分析を基礎とした恋愛哲学であり、医学者シュテーケルの恋に悩むもの、性障害に苦しむものへ注ぐ惻々たる人間愛の記録である」<sup>17)</sup>と紹介されているが、三島はおそらくシュテーケルと同じような悩みから冷感症に興味を持ち、『音楽』を創作するに至ったのであろう。洪沢竜彦が指摘しているように『音楽』は「精神分析の理論に則った小説ではあるけれども、もう一つの面から見れば、在来の精神分析の理論のみによってはなかなか割り切ることのできない、人間精神の不条理さ」<sup>18)</sup>をも描いている作品であるといえる。

シュテーケルは冷感症が起きるのは《私は出来ない》《私はしてはならない》《私はいやです》といった「秘められた命令」や「反抗」などが「性衝動を圧倒し、その自然の流れをはばむ」<sup>19)</sup>ためであると述べている。また、「冷感症の心因的原因のうちで、重要な一つの動機を見出す」<sup>20)</sup>ことが冷感症を治療するにあたって最も重要であると述べている。その「重要な一つの動機」は「感情生活が幼児期の理想に固着している」<sup>21)</sup>という幼児期の経験の影響から「その最初の理想であるところの両親とか兄弟姉妹とかに、あくまでも忠実であるためにも恋愛不感と誤認する。すなわち実現する希望がないために、固定化してしまうところの、満たされない願望」<sup>22)</sup>であるとされている。そのため、「幼児期の

11) 前掲書、ヴァルヘルム・シュテーケル(1955) p.6.

12) 三島由紀夫(2003)「フロイト「芸術論」」『決定版 三島由紀夫全集』第28巻、新潮社、p.202.

13) 前掲書、加藤邦彦(2011) p.121.

14) 前掲書、三島由紀夫(2003) p.202.

15) 前掲書、ヴァルヘルム・シュテーケル(1955) p.9.

16) 前掲書、ヴァルヘルム・シュテーケル(1955) p.9.

17) 前掲書、ヴァルヘルム・シュテーケル(1955) p.5.

18) 前掲書、洪沢竜彦(1970) p.261.

19) 前掲書、ヴァルヘルム・シュテーケル(1955) p.178.

20) 前掲書、ヴァルヘルム・シュテーケル(1955) p.177.

21) 前掲書、ヴァルヘルム・シュテーケル(1955) p.23.

22) 前掲書、ヴァルヘルム・シュテーケル(1955) p.23.

固着は弛緩することはあつても、けつして完全に取り除かれることはないのだ」<sup>23)</sup>とまで断言している。冷感症の肉体的な障害としては「食欲不振、嘔吐、善餓症などというヒステリー症状においていちじるしい」<sup>24)</sup>とヒステリーについて言及されており、「外傷後のヒステリー性精神病」の項には「ティック症」<sup>25)</sup>があげられている。

『音楽』においては冷感症の麗子が幼児期から実兄に執着しており、その兄との近親相姦的な関係を持つことによって生じた「兄の子を生みたい」<sup>26)</sup>という願望は兄以外の男性との関係を拒否させ、冷感症の原因となっている。汐見は「シュテーケルの言ふ如く、「すべての神経症者は自分の家族に悩み、ある知恵者がFamilitis（家族熱）と呼んだほどひろく伝播してゐるこの病気の痕跡を示してゐる」と『性の分析』第7章「幼児期への固着」の「家族の奴隷」の項から直接引用し、「麗子には、（中略）この種の近親相姦的外傷の存在をはつきりつかめずにゐた」と診ている。引用された内容の続きでは「家族の奴隷はその交際範囲を家族のみに限局する」<sup>27)</sup>と記されているため、麗子と実兄との近親相姦的な関係が冷感症の根本的な問題となっていることがわかる。また、麗子の冷感症の肉体的な障害としては「食欲不振」「嘔気」「チック (tic)」といったヒステリーの諸症状があらわれている。いずれもシュテーケルの理論を適用したものだと考えられる。医師の汐見は「音楽がきこえない」とする麗子の冷感症について「わけのわからぬこと」「不感症の問題については、あまり重大に考へてゐなかつた」と興味を持っていないような態度をとっているが、ヒステリーについては「彼女の軽微なヒステリー徴候にのみ心を奪はれて」いたと関心を示している。医師の汐見と患者の麗子の関係においてヒステリーはどのような影響を及ぼしているのだろうか。

### 3. 麗子の「ヒステリー」

麗子が汐見の診療所に訪れたのは、或る秋の日の朝である。夏ごろから食欲不振や吐き気などの症状に悩み、病院を転々したが、ついに原因不明の状態では精神分析科医の汐見を

23) 前掲書、ヴァルヘルム・シュテーケル(1955) p.43.

24) 前掲書、ヴァルヘルム・シュテーケル(1955) p.107.

25) 前掲書、ヴァルヘルム・シュテーケル(1955) p.108.

26) 三島由起夫(2001)「音楽」『決定版 三島由起夫全集』第11巻、新潮社（以下の引用の書誌情報は同一であり、省略する）。

27) 前掲書、ヴァルヘルム・シュテーケル(1955) p.229.

訪れたのである。汐見は麗子に初めて対面したとき、麗子の美しさに驚き、麗子のファッションや化粧、顔立ちなど、麗子の隅々までを観察していた。汐見が麗子に挨拶した時、美しい麗子の頬にチックが走るのを見て見ぬふりをしたが、自身のチックに気づいた麗子は「内心の狼狽」を見せざるを得なかった。汐見はそのような麗子について以下のように語っている。

不真面目な比喩かもしれないが、この瞬間の彼女は、ちらと狐であることを見破られた美女といふ趣きがあった。

明るい晩秋の窓外には、オフィスや劇場やホテルなどのビルが櫛比して、訪れる人は誰も近代的な診療所だと感心するこの待合室で、こんな幻想を浮んだのは、ずいぶん不似合いなことである。

汐見は近代的な診療所で麗子の美しさに魅せられ、狐という幻想に囚われる。社会が急速に発達するにつれ、精神疾患に悩む患者も加速的に増大し、汐見の診療所に訪れる患者数も多くなるのだが、殊に「このごろの新らしい傾向として」「無用の告白癖、いはば精神的露出症とでも言ふべきものを満足させるために」訪れる数多くの女性患者に悩まされていると汐見は語っている。麗子はそのような患者の一人であったといえるが、汐見は患者の麗子に一目惚れしたかのように患者以上の特別な感情を持つようになる。

汐見は「明らかに明るい微笑を浮かべようとしたのだが、正にその瞬間、その頬にチック(tic)が走る麗子を見る。そのチックは「まぎれもないヒステリーの兆候である」とすぐに判明するが、それに比べて「音楽がきこえない」とする冷感症に対しては「突然、わけのわからぬことを言ひ出した」と戸惑っているような様子を見せている。汐見は麗子の言う「音楽」に対して「単にオルガスムスの美しい象徴」であるか、「渴望するオルガスムスとの間には、一筋縄で行かない隠された象徴関係があるのではないか？」という「科学者としての探求欲」から自由連想法という精神分析的な療法を用いて最初の治療を施す。しかし、精神分析に詳しい麗子が「行きあたりばつたりの性的象徴を濫用したり」したため、「明らかに彼女の作為が働らき、作為と無意識とが、ふしぎな具合にまぎり合つて」しまい、第一回の自由連想法は失敗に終わる。その後も、麗子に試した自由連想療法は麗子の治療には役立たず、医師と患者の「対決」の手段としてしか用いられなくなる。汐見は「豊富な臨床経験から不感症を縦横に論じたシュテーケルの本を改めて読んでみて、世間で漠然と呼ばれているこの不感症といふ名が、いかに多義的で、いかに複雑多岐であるかを、私は思ひ知つた」と冷感症の治療の難しさについて訴えている。

麗子の音楽が聴こえないとする冷感症の症状は、「嘘なんですの」という患者麗子の一言で「単に嘘をついたのだ、と彼女は主張してゐるが、果してさうか？」と分析医の汐見に疑問を抱かせるほどわかりにくかったのに対して、ヒステリー性顔面痙攣は医者の方見の目にはっきり見えるのは言うまでもなく、「とてもへんなんです。自分でも気がつかないうちに、自分の顔が先走りするみたいで」と麗子自身も気づいている様子が描かれているが、「チックを起すまいとすると却つてチックが起る」という症状は「典型的なヒステリー性反対意志のいたづら」とされ、麗子はこの症状に悩まされている。しかし、ヒステリーが激しくなるにつれ、チックは患者麗子には気づかれなくなり、分析医の方見の目にしか映らなくなる。

「何が怖いんです」

と私はやさしく彼女の目を見た。そのとき、久々に彼女の頬に、一瞬ちらとチックが走つた。

この小さな稲妻のやうな痙攣は、私には見えない奇怪な小鳥のやうに思われる。この小鳥が彼女につきまとつて離れず、やつとしばらくどこかへ飛去つてみたのに、又元の巢に姿をあらはし、翼の一閃と共に、再び彼女の病んだ心に、その温かい暗いねぐらにもぐり込んだのである。

医師としてはまことに不都合な心理であるが、治療の失敗を示すこの兆候が、私の心に落胆よりも、一種の勝利の喜びに似たものを与えたことは否定できない。遠いところへ永久に去つてしまつたやうに思はれた麗子が、又私の懐ろへ戻つてきた、それが何よりのしるしだつたからである。

しかしこのチックは麗子自身には気づかれなかつた。

麗子自身には気づかれなかつたチックは、「治療の失敗を示す」兆候であるとされているが、それは汐見には「医師としてはまことに不都合な心理である」ものの、「落胆よりも、一種の勝利の喜びに似たもの」を与えたとされている。つまり、ヒステリーの病気が治つたとして汐見のもとを訪れなくなるはずであつた麗子が、汐見の「懐ろへ戻つてきた」証拠として用いられている。

#### 4. 汐見と「ヒステリー」

汐見は最初から冷感症の「音楽がきこえない」という症状よりもヒステリーに興味を持っていた。麗子のヒステリー徴候は「顔面痙攣」のチックだけではなく、食欲不振や嘔気も含

んでいるが、汐見はこれらの徴候に対して「何ら内科的疾患によるものではなく、ヒステリー症候群にちがひないことはわかつてゐる」とはっきりとした診断を下している。汐見にとっては表面的にあらわれるヒステリーの分かりやすさが自身を持たせたのではないかと考えられる。そのため、ヒステリーの診断に自身を持っていた汐見が麗子のヒステリーに直面した際には、冷静な医師として精神分析的な能力が発揮できると思ったであろう。しかし、それは麗子が患者としていられる時のみであって、麗子に対して「医師としてはまことに不都合な心理」を抱いていた汐見には精神分析的な能力は無用の長物であったろう。

麗子の第一回目の治療が失敗に終わった後の或る夜、汐見は同じ診療所で働いている恋人の山内明美と一緒に過ごしていた。その晩、汐見は「へんな影響を受けてゐたようで」「行為のあひだの或る瞬間に」「レコードの音楽が尽き」、「針が盤面の音のない溝を軽くこすつていつまでも廻つてゐる、そのかすれた音をきみたやうな気」がするのであった。慌てて妄想に逃れ、気づくと汐見の寝室には「蓄音機もなければ、レコードもまはつてゐなかつた」とされている。一見汐見は「音楽」を聴いたかのように見えるが、その「音楽」は音楽とはいえない、ただの「かすれた音」にすぎず、音楽が終つたのは、「記憶が遡ることもできないほど遠い昔」で、「音楽はずつと昔に死んでしまつてゐる」たのである。いつかはその「かすれた音」も聴こえなくなり、汐見は麗子のように音楽を聴けなくなるのであろう。汐見のこのような妄想は、今まで「精神的自由」を享受してきたと信じきっていたのが、麗子を知ってから、そうではなかったということを実感したための現象ではないかと考えられる。「精神的自由」を求めて麗子に執着しつづけた汐見は、やがて明美との情事のさい、明美の顔から「似ても似つかぬ麗子の顔を見出」してしまふ。その顔は麗子がヒステリーを起した時と類似しているとされているが、以下のものである。

麗子の恍惚とした顔を一度として眺めたことのない私としては、どんな想像を描くのも自由な筈であるが、それにしても明美の顔の上にそれを見るときは！

あとでこれを考へて、私が戦慄を禁じえないのは、それが果して、私の幻覚にとどまるものか、あるひは、明美の無意識の力が総動員されて、そのとき、恍惚に陥つた麗子の顔を表示してみせたのではないかといふ疑問である。性的昂奮とヒステリーとの類似さを、あまり推し進めてはいけぬが、宗教的ヒステリー患者における手足の聖痕の発現が、ヒステリー性症候群のうちの、限局部的水泡形成や、皮下組織の毛細管出血から説明されなくてもないやうに、明美の肉体は無意識のうちに、麗子の顔を完全に演じてゐたのかもしれないのである。

麗子に化けた明美に対して「聖テレジアに似た聖らかな顔つき」とまで聖化してたとえてみる汐見は、その夢から目覚められず、「麗子はそこで疑ひもなく聖女になつてゐて、「正しく彼女は、「音楽」を聴いてみた」と妄想に陥っている。汐見は、麗子に音楽を聴かせる、つまり麗子の「精神的自由」を満足させることによって、自身の「精神的自由」を満足させようとしたが、結果として麗子のヒステリーを精神疾患ではなく、自身の「精神的自由」を満足させる手段として用いているのではないかと考えられる。そのため、汐見の麗子に対する特別な感情は治療の際に、より執着的にあらわれているが、以下のようである。

これは久しく私の待つてゐた瞬間であり、今度こそこの薄明のなかで美しい白狐の尻尾をうかんでやらうと待ち構へてゐた機会の到来であつた。(中略)

私には負け惜しみの自身があり、どんなに深く彼女の肉体を知つた男よりも、私のはうがよく知つてゐるといふ、すべての男に対する軽蔑感があつた。どんなに詳細に彼女の肉体の褻に分け入り、どんなに隈なく彼女の美しい皮膚を味はつても、男たちは決して私のやうに彼女の真の深所へ、彼女のもつとも深いをののきと歡喜に触れることはできない。

麗子の精神を分析するということは、いわゆる麗子の精神を征服することを意味し、麗子と肉体的な関係をもつ男性たちよりも、麗子の精神を支配している自身こそ麗子の「深いおののきと歡喜に触れること」ができるのだというように、それが男の「矜り」であるかのように語られている。汐見に映された分析室の寝椅子に横たわっている麗子は「夜の天空から眺め」られた「夜の、灯火燦然とした大都会に似てゐて、その風景は「体全体にきらめく汗の滴を宿した」「ものうげに横たはる女体」のようであつた。汐見は麗子に治療を重ねるにつれ、医師としての職業は麗子を征服するための「仮面」に過ぎなくなり、やがて麗子を治さなければならないという医師の本分を忘れ、麗子を欲する「一人の男として」治療の失敗を期待するにいたる。

肝臓癌で死んだ又従兄の葬式後、東京に戻ってきた麗子は、汐見の診療所に訪れては又従兄の死から音楽を聴いたと言う。麗子は死を一種の神聖な儀式として受け入れている一方で、人が死なないと音楽を聴くことができないと訴える。麗子自身は「人を犠牲にしてゆく怖ろしい不吉な女」であり、「死の匂ひを嗅ぎつけていそいそと飛んでゆく鴉」であると自らを責め立てながらも、それは宿命であると言う。麗子は冷感症について自らが原因を究明し、治せる方法が見つかったと言っているが、それは彼女の「チック」によって無効となり、再び麗子の治療は失敗となる。汐見は麗子が治らない限り、麗子を自分のものに居

させることができるという安堵と、他の誰でもなく麗子の精神を征服できる自身こそ麗子の冷感症を治させることのできる唯一な男であるという喜びに充ちるのである。また、このチックは麗子自身には気づかれず、汐見にだけ見えたことによって、麗子自身よりも汐見の方が麗子をより知っているという意味を付加し、汐見に征服感を与えている。さらには、欲望が満たされないが為にあらわれている麗子のヒステリーは、汐見の欲望を満足させているという点で、相互的に作用しているともいえよう。高橋正雄は「医師のもとを訪れた女性の不感症は、この医師の治療というよりは、かつて愛していた兄の淪落した姿に幻滅したのを契機に治癒」<sup>28)</sup>されると述べているが、おそらく麗子のヒステリーを媒介にしてあらわれている汐見の麗子に対する欲望が、麗子を治療したくない、治療してはいけないという無意識を働かせ、治療を妨げたからであるということができよう。

## 5. おわりに

三島由紀夫『音楽』は精神分析医を主人公にし、〈女性の冷感症の一症例に関する手記〉として描き出された小説である。三島は『音楽』を創作する際に、シュテューケル『性の分析—女性の冷感症—』を参考にしたとされているが、精神分析的な理論だけでなく、冷感症そのものを恋愛問題として扱っている点も影響があったと考えられる。麗子の冷感症は恋愛の精神的な障害として用いられているが、それにとまってあらわれている食欲不振や吐気、チックといったヒステリーの諸症状は肉体的な障害として用いられている。

医師の汐見は冷感症に対してあまり興味を持っていないような態度をとっている一方で、ヒステリーには最初から興味を示しており、より積極的な態度をとっている。特に、ヒステリー性顔面痙攣としてあらわれているチックは患者のヒステリーが治っていないことの証拠となっており、医師の汐見にとっては一種の征服感を与え、麗子に対する欲望をも満足させている。つまり、汐見の欲望は麗子のヒステリーを媒介にしてあらわれており、その欲望からの無意識は医師としての本分を忘れさせ、麗子の治療を妨げている。

結果として「兄の子を生みたい」という麗子の願望が満たされなかったことや汐見の麗子への欲望が汐見の無意識を働かせ、治療がうまく行われなかったことを踏まえれば、麗子の冷感症が「治癒」されていないとみることもできよう。こうした解釈は「幼児期の固着は弛緩することはあつても、けつして完全に取り除かれることはないのだ」というシュテューケルの理

28) 前掲書、高橋正雄(2016) p.51.

論にも符合するところであると考えられる。

## 【参考文献】

- テキスト：三島由紀夫(2001)「音楽」『決定版 三島由紀夫全集』第11巻、新潮社.
- 加藤邦彦(2011)「冷感症の時代—三島由紀夫『音楽』と『婦人公論』—」『梅光学院大学公開講座論集第59集 三島由紀夫を読む』笠間書院、p.121.
- 渋沢竜彦(1970)「解説」『音楽』新潮社、p.257、p.261.
- 高橋正雄(2016)「精神医学的にみた近代日本文学(第20報)—三島由紀夫—」『聖マリアンナ医学研究誌』16(91)、pp.50-51.
- 西昌樹(1993)「サイコセラピー空間を旋りて(「仮面の告白」「金閣寺」「音楽」ほか)」『国文学解釈と教材の研究』38(5)、p.36.
- 朴秀浄(2018)「三島由紀夫における同性愛言説の受容—『仮面の告白』と『禁色』を中心に—」『比較文学』(61)、pp.72-73.
- 森まゆみ(2007)「三島由紀夫と『音楽』」『中公新書ラクレ239『婦人公論』にみる昭和文芸史』中央公論新社、p.267.
- 三島由紀夫(2003)「フロイト「芸術論」」『決定版 三島由紀夫全集』第28巻、新潮社、p.202.
- ヴァイルヘルム・シュテーケル(1955)『性の分析—女性の冷感症— 第1巻』松井孝史訳、三笠書房、pp.3-9、p.23、p.43、pp.107-108、pp.177-178、p.229.

논문 투고 일자 : 2019. 10. 12.

논문 심사 일자 : 2019. 11. 03.

게재 확정 일자 : 2019. 11. 06.

---

 <要旨>
 

---

 三島由起夫『音楽』におけるヒステリー表象  
 —シュテューケル『性の分析』の影響をめぐって—

朴美姪

三島由紀夫の長編小説『音楽』は精神分析医の汐見と患者の麗子の物語である。麗子は食欲不振、嘔吐、チック（顔面痙攣）などのヒステリー症状を伴う冷感症に悩んでいる。精神分析を主な題材としているため、フロイトやシュテューケルの理論が用いられている場面が多数描かれているが、特に三島由紀夫は作品についてのインタビューの中で、シュテューケルの理論を背後にこの小説を組み立てたと言及している。作品の中では汐見が冷感症を治療するためにシュテューケルの著作を参考にしており、その一部を直接引用している。創作の際に、シュテューケルの影響が多少あったと考えられるが、先行研究では、まだその影響について詳しく論じられていない。本稿では、三島由紀夫が創作の際に参考にしたとみられるシュテューケル『性の分析—女性の冷感症—』が作品の中でどのような影響を及ぼしているのかについて考察を行いたいと思う。特に、麗子の冷感症の主な症状として用いられているヒステリーが作品の中でどのような役割を果たしているのかについて分析を行いたいと思う。

 Influence of Hysterical representation in Yukio Mishima's *Music*  
 —Wilhelm Stekel's *Frigidity in Woman in Relation to Her Love Life*—

Park, Mi-Jeon

Yukio Mishima's novel *Music* is about a story of a psychoanalyst, Shioimi and his patient, Reiko, who suffers from sexual arousal disorder with hysterical symptoms such as loss of appetite, vomiting, and tic (facial spasm). As psychoanalysis is the main theme, there are many scenes Freud's and Stekel's theories are used. In particular, Mishima mentioned in his interview about the work that he had written this novel according to Stekel's theory. In the story, Shioimi refers to Stekel's work to treat sexual arousal disorder and directly quotes its passages. It seems that Stekel's theory influenced on the novel, but that has not been fully discussed. In this article, I would like to examine the influence of Stekel's *Frigidity in Woman in Relation to Her Love Life : Disorders of the Instincts and the Emotions*, which Yukio Mishima used as a work of reference when he wrote this novel. In particular, I would like to analyze the role of hysteria, which is described as the main symptom of Reiko's sexual arousal disorder.